

# 京都教育大付高 関西大会V

## 模擬裁判 努力を立証

近畿の高校生が検察側と弁護側に分かれて立証を競い合う「高校生模擬裁判選手権関西大会」(日本弁護士連合会主催)が今月、大阪市内で開かれ、京都教育大付属高(伏見区)が優勝した。生徒らは休日返上で練習に取り組み、2位に終わった昨年の雪辱を果たした。  
(落合宏美)

### 質問 5時間熟考

「皆さんは無限に広がる子供の未来を考えたことがありますか。被告は、その未来を閉ざしたのです」

今日1日、大阪地裁の法廷に検察官役の女子生徒の声が響いた。スーツ姿で裁判員役の人たちの顔を見回し、ゆっくりと語りかけるしぐさは、法廷で目にする検察官そっくりだった。

大会は、論理的な考え方を養い、法曹界に興味を持ってもらおうと日弁連が2007年から関東や近畿など全国4地方で始めた。参加校は架空の事件を題材に検察側と弁護側に分かれ、本物の法廷を舞台に戦う。

今年の関西大会には6府県の8校が参加した。題材は21歳の母親が泣きやまない乳児を窒息死させた児童虐待事件。各校は検察側と弁護側を1回ずつ演じ、裁判官や検察官、弁護士らが論理性や立証態度などを審査して順位を決める。

京都教育大付属高は過去6回優勝、2回準優勝の強豪だ。今

年のメンバーは1と2年の男女8人。生徒らは被害者や被告の気持ちに近付くため、育児中の母親や冤罪被害者らの話を聞いた。

「こんな論告では被害者に寄り添えていない」。生徒らは、時には指導する札幌和男教諭(53)の叱責を受け、被告や証人への質問一つを考えるのに5時間かけることもあった。

### 小道具 効果的に

迎えた本番。最初は検察側で同志社香里高(大阪)と対戦した。生徒らは模造紙に犯行現場を描いて法廷で示すなど、わかりやすい立証を心がけた。

弁護側を演じた立命館守山高(滋賀)との対戦では目撃証言のあいまいさなど検察側の不備を指摘。「被告は寝かすつけようとして体に布団をかぶせて押さえただけ」と訴え、最後は「無罪」と書いた紙を白板に力強く張り付ける迫力に満ちた最終弁論で締めくくった。

成績発表で優勝校として名前を呼ばれると、8人はガッツポーズ。感涙する女子生徒もいた。将来は検察官になりたいという1年香月響介君(15)は「被告を単純に悪人ととらえず、気持ちも考えたい」と視野が広がった様子。2年山本紗萌さん(16)は「別世界だった実際の事件を身近なこととして考えるようになった」と話した。

審査した大阪弁護士会の山本健司副会長は「マニュアルに頼らず、自分たちの頭で考えたことが伝わる立証だった。参加校は被害者に見立てた人形や、凶器と同一のタオルを使うなど工夫を凝らし、我々も勉強になった」とたたえた。

札幌教諭は「生徒たちには物事の表面にとらわれず、その奥の真実を見る力、判断できる力を身につけてほしい」と話した。



弁護士を演じ、被告役の女性に質問する生徒ら(大阪市北区の大阪地裁で)